広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	スナップ
Author(s)	児童の言語生態研究会,
Citation	児童の言語生態研究 , 9 : 73 - 75
Issue Date	1978-06-08
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045108
Right	
Relation	

スナップ

○出席をとるとき、ひとりの子どもを抜かしてしまった。私がしまったと思ったとたん、
Y君「先生、言いのがれたな。」
みんな爆笑。本人も
「いっけねェー」
T君「それを言うなら言いのがしたな、だろう。」
S君「いや、それを言うなら、言い抜かしただよ。」
（S51・9月　五年生男子）

○六年三組だけクラスの担任が変った。
A「ね、ね、三組だけ先生変わったんだって」
B「うん」
そこへ私が通りかかったのを見て
B「だって、かわった先生だもん」
洒落のつもりか、路線を変えたのか。（S52 4月　六年女子）

○四月当初は委員会活動で、委員長を決める。選ばれた委員長の弁
Nさん「私は○○です。ふつつか者ですがよろしくお願い致します。」
しゃっちょこばってなかなか上手に司会が出来ない。するとM君が
M君「全くふつつか者だよ。」
少し考えて「だからそうことわったのかな。」（S52 4月　六年男子）

○クラブ指導担当が野球部になった。まず初めに演説する。
T「私はみんなより、下手だと思いますが、そこは、カバーしてほしいと思う：云々：。」
クラブの時間が終って、キャプテンが
K「へっ、先生尊敬しちゃって」
（S52・4月　六年男子）

○理科の教材にたまごの成長がある。となりのクラスはヒヨコが生まれて大さわぎ、うらやましいのか、
O君「ひよこが生れてさ、となりのクラスは、大人げないんだぜ。」
Y君「そうだよな、ヒヨコは子どもだもんな。」とボソボソ
（S52・5月　六年男子）

○新教育課程の移行措置で、学校裁量の時間が出来た。その名に「児童活動」とつけている。まだ、路線が決まらないので、私が学級会と同じようにしていると、
S君「先生児童活動って、ぼくたち活動するんでしょ。なんだか教師活動みたい。」手厳しい。（S52・5月六年生男子）

○男子が泣くとき
始業のベルが鳴ったので、教室に行ってみると、H君が泣いている。なかなか理由を言わない。泣かしたと思われる子に聞くと、
O君「ぼく、ちょっと言っただけだよ。」
T　「何を？」
O君「H君とIさんの洋服おそろいだねって。」
二人は並んでいて、その日は赤と黒のシマのシャツを二人とも着ていた。Iさんは黙っていて、H君はくやし泣きをしている。私も思わず、ニヤリとしてしまい、よけい彼を傷つけてしまったので、急いで
T「でも、あなたは、その服とってもよく似合うよ。」と言うとにこっと笑って、その子は毎日それからその服ばかり着てくる。
反対にIさんは、決してそのシャツを着てこない。
（S52・5月　六年生男子と女子）

○教室に行ってみるとO君が泣いている。どうしたのかと理由をたずねても答えない。隣りの子に聞くと、
Y君「O君がね、おかわりをしたら、誰かが『いやしいよ』っていったんだよ。」
T　「だれだ。」
M君「ぼくはそんないやしいなんて、感情のことばは使いませんでした。」
Y君「言ったね。それから、O君が泣いていたら、いじけてるなんてことも言ったんです。」
N君「そうだよな。だからよけい泣いちゃったんだよ。」
いじけている、いやしいは品格を示すことばなのだろう。
（S52・5月　六年生男子）

○隣りのクラスの子どもが生れたヒヨコを見せに来た。各班毎に呼んで見せる。箱に入れてきて、ずっと持っているので、重いらしい。いいかげん、いやになったらしく、
A君「もうごぶさたしたいよ。」
（S52・5月　六年生男子）

○このごろ反省会で意見が白熱する。
M君「ぼくも悪かったと思いますが、Aさんも改めてほしいと思います。」
I君「だいだいM君は反省しているのに、Aさんは反省の色がないと思います。」
Y君「ヘッヘー　反省に色なんてあるのか。」
（S52・5月　六年生男子）

○代表委員会のある日、色々な委員を兼ねているS君が、私の所に困った顔をしてきた。
S君「先生、ぼくは代表委員できょうの代表委員会に出なければいけないんですけれど、農園委員会の委員長でもあるわけでぼくはどちらの顔をして出たら良いのでしょう。」
人材の少ない今年の六年生、さすがにこの子は顔役である。
（S52・5月　六年生男子）

○野球部の指導担当になってから、野球部の子どもに会うと、みんなにやにやする。
キャプテンに会ったので
T　「オ！キャプテン、オッス！」
というと
K君「なんでェー　コーチ。」
T　「かっこいい、キャプテンだな。」
K君「ヘッヘ、カントク。」
T　「たのむぞキャプテン。」
K君「かんとくさんヨロシク。」
（S52・5月　六年生男子）

○給食の時間、私が手を洗いに行って、教室に帰ってきて、ドアーを閉めないとY君が、
Y君「先生、あけたら、ちゃんとしめなさい。」
と、いばって言う。
T　「すいません。」
と閉めに行くと、
Y君「わぁー一本とってやったぞ。」
と、大喜び。
（S52・5月　六年生男子）

○S君が深刻な顔をして私の顔

をのぞき込むようにして言う。
S君「先生、ぼく小学校、もうあきちゃったよ。」
T「早く中学に行きたいの。」
S君「いやそうでもないんだけど、なんかこのごろ、みんなとすることに疲れを感じるんだ。」
T「じゃぁ、勝手させてもらえば？」
S君「そんな一番勝手させてくれないのは先生じゃないか。」
そう言えば一番コキ使っている子であった。
（S52・5月　六年生男子）

○進学を希望している児童の母親から、面接希望の電話があった。連絡帳に希望日を書いて渡そうと思ったが、思うように日にちがとれない。五日後に、その日を記入して渡すと、
M君「先生、単に五月十六日と書くだけで、五日間もかかったんですか。」
（S52・5月　六年生男子）

○知ったかぶり
ノートに答えを書かせている最中、つい月日を見ていらん事を言ってしまった。
T「そういえば、きょうは十三日の金曜日だね。」
I「ほんとうだ、いやだなぁ。」
O「なんで、そうなの。十三日の金曜日って何だい。」
これで、どっと大笑い。そしてからかうように
I「おまえ、十三日の金曜日も知らないのかよう。」
O「知っているサ、ちょっと聞いてみただけだよ。」
Y「じゃ、言ってみろよ。なんだか。」
O「そりゃぁ、十三日の金曜日さ。」
I「キリストが死んだ日なんだよ。」
O「そうさ、命日さ。」
もう、ここで話を打ち切らせた。寸暇を惜しんで授業をつぶそうとする魂胆が見える。それにしても、知ったかぶりははげしい。（S52・5月　六年生男子）

○気取り屋
屋上でかげの観察をやり終って、日だまりの中で子どもたちが、てんでに寝ころがっている。いろいろな寝すがたが出来たがその中でM君だけが、足を組んで、頭の下に手を組み静かに目をとじている。私はおかしくて思わず
T「M君を見てごらんよ、気取っちゃって寝ているときまで気取っているよ。」
すると、みんながワーワーそばに行き鼻にさわったり、わざと目をあかせようとした。しかし、ついに、その屋上から帰る笛の合図があるまで、その姿でがんばっていた。
（S52・5月　六年生男子）

○身内
父親参観の前の日、一生懸命清掃を手伝っていると、
S君「どうして、きょうはこんなにきれいにするのですか先生。」
と、にやにやしながら言う。
T「明日お客さんが来るからよ。」
S君「お客さん？　あっおとうさんの事、ありゃ客じゃないよ。身内だよ。」
（S52・6月　六年生男子）

○男の恥
泣きたい思いという題で作文を書かせてみた。題を黒板に書くと、どよめき
O君「おれ書けないよ。なかないもん。」クラスで一番泣き虫である。
I君「そうか、おまえよくなくじゃん。」
O君「いやーあれはくやしがっているだけさ。」
I君「でも涙なんか出てくるぜ。」
O君はもう泣きそうである。
M君「ぼくはこの題では書きたくありません。」
T「どうして。」
M君「理由も言いたくありません。」
T「無理でも書くこと。」
あとで、M君の作文を見てM君をよぶと
「泣くことは男の恥です。恥なことなんて書きたくありません。」
と、きっぱり。
（S52・7月　六年生男子）

○目にさわる
そろそろ夏休みも近くなった学期末、テストの採点で、おおわらわ、放課後教室でマルつけをしていると、清掃の子がすぐ近寄ってきて点を見ようとする。
T「まじめに当番をしなさい。」
K君「先生どっかへ行ってよ。どうも先生がいると目にさわるよ。」
M君「え？目にさわるって」
T「目にさわるね：」とニヤニヤしていると
K君「おかしいか。そうだ気にさわるよ。」
T「気にさわるね。」
T君「それを言うなら目ざわりっていうんじゃない。」
（S52・7・13）

○ひやかし
Aさん「先生、ここんとこの答おしえて。私N君とかけをしたの。私のがあっていたら、N君私にけしごむくれるの。」
T「ばくちだな。よくない。」
ところでTさんはN君に何をあげるんだ。あ、そうか一枚脱ぐんだな。」
みんなヤナ顔、ひやかして私も内心あまり良くないことを言ってしまったと後悔したとたん
S君
S君「先生そういう言い方やめてほしいな。ぼくはきらいだよ。いつもZ先生なんかすぐ男とか女の話をするからいやなんだ。だからそういう言い方よして下さい。」
きっぱり言われたので、エリを正して
T「ごめんね。あやまる。」
というと、ほっとしてニコニコ笑う。なんとなくますますそのS君が好きになってしまった。
（S52・7・15）

○ひとつのリクレーション
林間学校で男子が女子の部屋にからかいに来る。
Aさん「先生、男子がスリッパを投げるんです。」
Iさん「のぞくんです。」
私が男子のところへ怒りに行くと
M君「わかっています。おこられる理由は。」
T「そうか。おこられるためにやっているようだな。」

M君「ええ、ひとつのリクレーションです。これも、はい。」と頭を出す。
私も出された頭をなんとなくポカリとする。（S52・8・1）

○山に登っていて、中学生の一行と行き合い中学生がダウン寸前。その前を行くと中学生が、「ガキのくせに生意気だ。」と言う。
M君「ガキだって、ぼくらのことガキだって。」
C君「生意気なのは、あっちだよね、先生。」
T「うん？」
M君「だって、登れもしないのに。ガキだなんてばかにしてさ。」
C君「そうだよ。ああいう人をブジョクしたことば気に入らないな。」
ガキということば、上下のことばに敏感になっている。
（S52・8・6 六年男子）

○みとれる
給食の時間私が食べ終って、ぼーと子どもを見ていると、他の子が私を呼んでいる。
S君「先生みとれちゃってさ。」
今度はそちらをふり返って見ていると、
S君「いやだな。先生にらみっけちゃって。」
T「同じ顔をしているよ。」
S君「いや、さっきは魂がなくて、ぼくたちを見ているときはあくどい根性が見えるよ。」
（S52・12・上旬 六年生男子）

○算数の時間、私が聞きまちがえをした。
N君「あ、先生耳まちがえた。」
T「ええ？」
みんな「アハ…」
Y君「それは聞きまちがえただろう。」
T「先生も、口まちがえないようにしょう。」
M君「先生、人のまちがいをいつまでも言うのは良くないよ。」
（S52・12上旬 六年生男子）

○意識と意志
卒業文集のなかみがなかなか書けない。もうS君は四回目である。私が読んでなかなか何も言わないので打診してくる。
S君「あー あの顔じゃ、だめだってことだな。これを渋い顔って言うんだろうな。」
等、いろいろ言う。
「自分と将来と」という題で書かせたので、自分とそれから時間の流れの中にいる自分の意識のことだと、意識ということばを教える。
「うーん、わかったよ。なんとなく。」次の日また持ってくる。ずいぶんすっきり整理されて書いてある。
T「S君、君、意識ってことば教えたでしょう。」
S君「うん、でもぼくどうしても意識って使えなかった。意志は使えるけど。」
そうかもしれない。
（S52・12月上旬 六年男子）

○二学期の片付けをしているときに、Kさんが、
Kさん「先生、私が五年生のときS先生が私のこと、先生に似ているって言われて、いやになっちゃったんだよ。」
T「どうして、いやになるの。」
Kさん「いやじゃない。それにその時、先生に似ているというのを聞いていた男子がそのことを根にもって、いまでも言うんだよ。」
（S52・12／25 六年男子）

○五才の男の子
ぶどうのたくさん入っているぶどうパンをぶどうだけをよって食べている。
母親「Fちゃん、ぶどうばっかり食べないであとで、パンも食べるのよ。」
Fちゃん「わかっているよ。でも、じゃまだなあ。」
母「何が？」
Fちゃん「このパンだよ。」

（以上町田三小・小泉節子教諭報告）

○二年生の男子
パチンととめる大きなクリップをいじりながら見ている子がいる。
T「それ、何って言うのか知ってる？」
C「？」
T「目玉クリップっていうの。」
T「どうしたの？」
C「きずついた。」
C「だって、ぼくが目玉が大きいからでしょ。」
（以上町田三小・峰尾富美子教諭報告）

○スナップ1 大正小五の二
算数ドリル2と3の宿題を忘れたO君が、放課後ノートを開き始めたとき、△君が来て、
△「○君、3だけやるの。」
○「ううん「う」だけやればいいの。さんすうの「う」の分だけ。」
△「そうか。「さんす」はやって「う」だけか。じゃすぐだね。」

○スナップ2
脚本の学習、「君何するの。」のせりふを順に言わせたとき
後藤（てれながら）
「君。なにするの。」
上野大声で「きざなせりふだねえ。」（爆笑）「いやいやだしわざとらしい！やっぱり、きざなせりふだねえ。」

○スナップ3
「木龍うるし」の権八について、中村さんの意見と母親の意見と対立した。その報告から
中村「私は、ずるい権八はきらいだっていったらお母さんは、人間は、ずるい位でなけりゃだめだから、権八のずるいところは、いいところだと思うというのよ。でも私は、やっぱり、いやなものはいやだから、そういったら、けんかみたいになっちゃった。」
先生「それで、お母さんの意見について、あなたは、どう思うの。」
中村「お母さんは、ずるい位でなけりゃお金がもうからないなんていうんだもの。家計をあずかっていると、そうなるのかもしれない。心がまがっちゃって、やだなあと思う。」
（以上大正小・市山仁美教諭報告）